

No.11 蛙のひやかし

昔々、吉原がまだ盛んだった頃の話。ここへ行く途中には吉原田んぼと呼ばれた広大な田があった。男共は毎夜毎夜この田の中の一本道を胸を弾ませて通ったものである。これを毎日見ていたカエルたち。

「人間たちやぁ毎晩毎晩吉原へ行くねえ。吉原ってそんなに良い所なのかねえ？俺たちも向学のために一度行ってみようじゃねえかい。トノサマ、どうだねえ。あんたなんか様子がいいよ。アカはどうだい？アオもヒキもいいよ。ガマやイボだって行きたけりゃ連れて行ってやるぜ。さあ、みんないいかい、俺たちも人間どものように立って行こうじゃねえかい。」

こうして、衆議一決。吉原田んぼのカエル達が全員列をなしてナカへ繰り出していった。

「きれいだねえ。えー、見ろやい。俺はあの「八橋」のアヤメの花柄の女が気に入ったねえ」

「そうだね、俺たちにゃ八橋は懐かしいからね。一つあの女の名前ぐらい聞いてみようじゃねえかい。」

「ねえ、若い衆。あの八橋の着物を着ているおいらんは何ていう名前ですかい？」

「え？、うちには八橋の着物を着たおいらんなんかいませんよ??？」

カエルは立つと、目が後ろについているので、道の反対側の店の若い衆に声をかけてしまったのである。

